

## 比較体育研究の性格，基本的視点および目的

石川 旦\*

### The Nature, Basic Viewpoints and Aims of Comparative Physical Education

by

NOBORU ISHIKAWA\*

#### Abstract

No complete delineation of the comparative methodology of physical education has yet been made in Japan, and also in other foreign countries. Therefore, the present author intended to try to clarify the concepts of the nature, basic viewpoints and aims of comparative physical education by making refer to mainly those materials on methodology in the field of physical education and in comparative education. Following concepts were rationally arrived at in this study:

1. Comparative physical education may be defined as an important area of study in the discipline of physical education or science of human movement in which problems concerned with the human development through physical activities in two or more countries are compared simultaneously with reference to their determining factors so as to clarify differences and similarities among them.

2. Phenomena of physical education in other countries must be looked upon as living things and they need to be understood in their actual realistic structural context. Comparative physical education must provide the basis for the formulation of future improvement of one's own system of physical education.

3. Aims of comparative physical education were reasonably well defined by Don Anthony in England. However, it is the present author's belief that the aims and purposes of comparative physical education must be constructed with operational terms as clearly and objectively as possible so as to enable students to pursue their studies with positive image of significant outcomes in mind.

4. Comparative researchers in physical education should be humanitarian and strive for the formulation of international physical education programs and for their inception. [Proceedings of the Department of Physical Education, College of General Education, University of Tokyo, No. 9, 1975, 73-82]

#### 1. 研究の目的

E. J. King は、「生活の実際の営みや決定によってかわって、用語や方法論が教えられたり研究されるようになったら、非常に残念なことであ

る<sup>1)</sup>」と述べているが、それは、研究方法論が相当程度に時間をかけて検討されてきている比較教育学の分野において云えることであって、これから学問的に組織的な研究が開始されようとしている比較体育の領域においては、必ずしも妥当しな

\* 東京大学教養学部体育研究室 (Department of Physical Education, College of General Education, University of Tokyo)

いであろう。

新しい学問的な研究領域を開発するに当っては、関連する他の学問分野およびそれが属する研究分野のこれまでの研究方法論や成果を参考にして、研究の主題と目的に応じた独自の研究方法論を構成しようとするには意味があり、また必要なことである。

本研究は、このような観点に立って、すでに強い関心が示されながらも、諸種の理由によって十分な進展がみられていない比較体育研究について、その考えられる1つの理由が、研究方法論の検討と確立の不十分さにあるという判断から、これを理論的に構成することを試みようとするものである。

研究の手順としては、まず国内・外の比較体育に関連する文献（単行本、研究論文、雑誌記事など）を概観し、これらの研究方法論上の問題点および必要性を明らかにしたうえで、すでに比較的研究が進んでいる他の学問分野の比較学的研究に関する文献（主として比較教育学の分野の単行本および研究論文）に論述された研究方法論を参考にして、それらを比較体育研究の領域に適用する形式をとった。

学問的な研究方法論の内容構成にはいくつかの中心的な記述項目が考えられるが、この小論においては、テーマを研究の性格、基本的視点および目的に限定して検討することにした。

## 2. 従来の研究の概要

わが国における外国の体育・スポーツに対する関心は、とくに明治の初期より、富国強兵政策にもとづく近代化への要求に応じて、「摂取」というかたちで存在してきた<sup>2)</sup>。これを自国のそれと対等な立場で客観的に同時に比較検討する条件が整ったのは第二次大戦以後<sup>3)</sup>のことで、しかも、意図的な比較研究への関心が強まったのは、1960年代、とくに東京オリンピック大会の開催および同時に開かれた国際スポーツ科学会議を契機にしてである<sup>4)5)6)</sup>。また、最近では、体育専門誌において、特集として、このような体育・スポーツ等の事象を国際的に比較しようとする傾向が多くなり、られるようになってきた<sup>7)8)9)</sup>。

しかし、現在までのところ、妥当な基本的観点と合理的な手続を用いて有意義な成果をうみ出すことを期待させるような比較体育の学問的な研究方法論は、まだ全く検討されてきていないようである。1957年に出版された『保健体育学大系8 体育学事典』では、体育原理の研究方法和方向を説明する中で、その重要なものの1つとして「比較体育の研究に努力すること<sup>10)</sup>」が指摘されているが、しかし、その実際的な技術または方法については解説されていない。また、1970年の『体育科学事典』においては、体育研究の方法における歴史的研究の説明の中で、『……現代史に属する事柄の比較は「比較体育学」の名の下に新しい研究分野が開拓されつつあることを注意すべきである<sup>11)</sup>』とだけ述べられていて、この問題に関するそれ以上の説明はない。

このように、わが国においては、比較体育に対する研究の関心がかかなり高まってきているとはいながらも、実際の比較研究を推進するための方法論はまだ全く確立されておらず、そのために、まだ直接的な研究への着手が非常に遅れているといつてよいのではないと思われる。

これに対して、アメリカ、イギリス、カナダ等を中心とする諸外国では、すでに現在までにある程度の組織的な比較体育研究の努力がなされ、その成果がいくつか発表<sup>12)13)14)</sup>されている。そして、アメリカやカナダ等では、すでに相当数の大学における体育専門課程の中で、比較体育・スポーツ・レクリエーションに関するコースが設けられ、中でもスプリングフィールド大学では、すでに1948年に設置されたということである<sup>15)</sup>。Ben W. Miller のアメリカにおける最近の調査によると、31名の専門家が何らかの形式の比較体育のコースを開設し、1966年までには16の大学がこれを開設したという<sup>16)</sup>。しかし、その名称、内容、方法、指導者の資格や必要な資料の入手についてはなお多くの問題があることが指摘され、かれらにおいても、比較体育の研究がまだ開始されたばかりで、胎生期の状態にあることを示している。

しかしながら、すでに確立されているいくつかの保健・体育・レクリエーションの専門国際機関は、会員の間必然的に国際比較への関心を醸成